導入リポート

インパムシール

シリウスビジョン製検査機で「守る未来の需要」

普段着も、大事な場面でも

㈱インパムシール（岡山市東区西大寺新地、岩田大樹社長、☎086・944・5661）は70年以上の歴史を持つ中国地方のラベル印刷会社。製造を行う当社のほか企画営業、デザイン制作の3社でインパムグループを構成している。グループのものづくりを担う現場では多数の印刷機に加え、シリウスビジョン製の検査装置群3台を設備。クライアントの要求する品質基準を満たすラベルを提供している。社内変革で進化を続ける、インパムシールの動静をリポートする。

シリウスビジョン製の検査機を運用。４台中３台が同社製のものを設備し、自社が定める品質基準の維持に活用している

同社では現在、ラベルの全面検査機を3台設備するほか、検版装置も1台稼働中。検版装置を含む4台中3台が、シリウスビジョン製の装置を運用している。

同社との接点は6年前の検版装置と振り返る岩田社長は「殖版作業で必要なマークを落としていることに誰も気づかず、大きなクレームに。まさか大事なマークが消えているとは誰も思わず、熟練工でも起こり得るなら機械の力を頼ろうと考えた」と振り返る。

次に老朽化した検査機を入れ替える場面で「当時としてはユーザーインターフェースが突出し優れていたシリウスビジョンを選択した」と横軸タイプを設備。その後縦軸タイプを追加した。「困った時に電話で遠隔調整してくれるなど、サポート面も助かっている」と評価している。

シリウスビジョン担当者から〝検査レベルの設定は日本でもトップクラスの厳しさ〟といわれるように、過検知を回避する同社のアルゴリズムをもってしても「時に検査工程で時間を要することもある」と同氏。

岩田大樹社長

設定の度合いによっては、100件近く検出する場面も。「そのうち本当のエラーは1件だけ、ということも」としながらも「予兆管理としても役立つ」と述べる岩田社長は「例えばインキが散る兆候が見られるとき。許容範囲内であってもインキの供給量が多いと『この後もっと悪化する可能性あり』『だから留意せよ』といったイメージ」の解釈で運用効果を語る。

このほかシリウスビジョンと㈱UniARTSが6月に発表した「AI印刷検査」に期待を寄せていると話している。「検査機がエラーを検出しブザーが鳴れば、その度にため息が出てしまうので」（同）

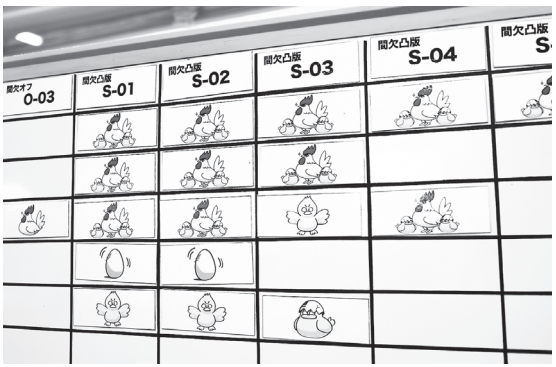
とかく耳にするのは製造業で検査は無駄、品質は本来川上で改善し工程で作り込むもの。あるいは生産機ではない検査機は本来不要な投資だともいわれるが「そうは思わない」と岩田社長は説く。

知らずに「失注しない」

例えば安価なファストファッション。糸がほつれているとクレームを出す人も居れば、着れたら問題ないという人もいる。わざわざ声をあげずとも、それが何回も続けば「もう買うのを止めよう」と思いかねない。普段使いならよしとしても、大事な時にそのブランドは選ばないだろう。

これをラベルに置き換えたらどうなるか。目をつぶらせていることに気づかず、大事な場面で選ばれず、知らぬ間に失注していないだろうか――。「案件ごとに必要な品質基準を設定したとしても、自社が定めたグレードを満たしたものをお届けすることが、未来の需要を守ることになる」。検査機を運用する真意を、岩田社長はこう説明する。

今後は省人化の重要性を説く同氏。「昔は設備費より人件費の方が安いから、2直3交代で高い機械を安い人件費で回していました。それが逆転して、人件費の方が高くなる日がいつか来る」。省人化へ機械を増やした方が得策か。業務を輪切りにして分業化を図り、成長分野を探していく――。若き代表の社内変革は続く。（聞き手・上田）



従業員の機械習熟度が多能工化の印